

St. Luke's International University Repository

New Perspectives on Several Fundamental Theories in the Research of Development

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 廣瀬, 清人, 小林, 京子, Hirose, Kiyoto, Kobayashi, Kyoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00000117

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



総 説

発達研究における基礎理論の展望

廣瀬 清人 小林 京子

New Perspectives on Several Fundamental Theories in the Research of Development

Kiyoto HIROSE Kyoko KOBAYASHI

[Abstract]

This study examines several fundamental theories in the research of development for the purpose of circumscribing the theoretical standpoints that undergird this discipline. First, developmental studies can be divided into two primary viewpoints, one focusing on early childhood and the other on life cycle. Regarding the former, there is subdivided into two standpoints, one focus on the individual behavioral changes corresponding to chronological order, and the other on acquiring various behaviors in the in one's interpersonal relationship. Freud and Piaget belong to the former while Bandura and Vygotsky to the latter. Regarding the theory of life cycle development, Havighurst and Erikson are given due treatment as the distinguished theorists of this discipline. Effort will be made to clearly differentiate between Havighurst's developmental tasks theory and the Erikson's socio-psychological theory, and finally new viewpoints of Erikson's theory will be discussed.

[Key words] Research of Development, Individual, Group, Life Cycle

[要 旨]

本研究は、発達心理学の領域における代表的な理論を整理することによって、個別の発達研究の位置づけを容易にすることを目的としている。最初に、発達研究は、主に生涯の前半に焦点をあてたものと、生涯発達を視野に入れていた2つの立場に大別される。前者は時系列に対応して個人の発達を検討する立場と、対人関係に焦点をあてて行動の獲得を検討の中心におく立場がある。前者の代表はフロイトやピアジェであり、また、後者のそれはバンデューラやヴィゴツキーである。さらに、生涯発達理論についていえば、ハーヴィガーストとエリクソンの名前を代表的な研究者としてあげなければならない。本稿では、ハーヴィガーストの発達課題とエリクソンの心理・社会的発達理論の差異を明らかにし、これまで看護学において言及されることのなかった後者の新しい見方を検討する。

[キーワード] 発達心理学, 個人, 集団, 生涯発達

I. 構 成

本稿は、今日、広く認められている主要な発達理論を概観して、発達理論の整理を目的としている。これによって、発達理論を用いる研究の位置づけが容易になる。発

達理論は、発達初期の行動の獲得あるいは変容が顕著なため、この時期に焦点をあてた理論が先行した。さらに、発達理論は「個人」に焦点をあてた立場と「対人関係」のなかで行動を獲得する立場に分けられる。

こういった理論が先行した後、青年期以降を含む生涯

発達理論が提起されるようになった。こういった歴史的な系譜を論じ、その後、ハーヴィガーストとエリクソンの理論の差異を検討する。そして、最後に、これまで看護学では言及されてこなかった後者の新しい解釈を論じる。加えて、人の発達に基盤を与える愛着を検討する。

II. はじめに

看護の対象である人を「生涯発達する存在」として捉えることは、多くの場合、基礎教育の初年度に学ぶ対象の捉え方の中核である。一方で、看護学は小児看護学、成人看護学、老年看護学などの様に人の特定の時期を対象とする学問領域に分かれており、学生は時として生涯発達とは一体何であるのかを実感とすることが困難になる。つまり、生涯の発達全体のダイナミズムよりも、特定の時期（ライフステージ）の発達課題の達成をつなぎ合わせたものを生涯発達と捉えがちである。

また、上記の特定の時期の看護の提供において発達を捉える際、各発達理論の焦点・背景を十分に理解しないまま、6歳の子どもはこれができる、ここまでの発達に到達しているといった、時期や年齢に対応した発達状態のあてはめによって対象理解を試みることもある。もちろん、この様なあてはめも対象理解の手がかりとなるが、本来看護は、その人のこれまでを情報の一つとして、現在とその先の課題への支援を試みるものである。すなわち、看護は健康問題の病因を探索してそれを取り除くというだけではない。病因とその結果としての健康状態を持ったその人が、現在とこの先に直面することが予測される課題にどの様に対処できるのかを探索・支援するものである。そのため、看護は変容する対象者の状態と生涯発達との相互作用を繰り返し検討するものである。

そこで本稿では、フロイト、ピアジェ、バンデューラ、ヴィゴツキー、ハーヴィガースト、エリクソン、ビューラーとボウルビイの理論をその焦点とともに整理し、特にハーヴィガーストとエリクソンの理論の差異を検討することで、看護における生涯発達の基本的な考え方を考察する。

III. 発達とは何か

国語辞典によれば「発達」は「発育して完全な形態に達すること」「進歩発展すること」などと定義されている。一般に心理学では発達を「ヒトの成熟した状態への変化の過程」と捉える。ヒトは、環境と生活体の相互作用を通じて、心身の機能や構造の分化、あるいは、統合に向かう。

IV. 「個人」に焦点をあてた発達理論

発達する主体は個人なのだから、個人に焦点をあてた理論が先行したのは自然であろう。発達心理学は、比較的長期の時間経過を独立変数にして、それに対応した発達主体の行動の獲得あるいは変容を問題にしている。したがって、理論化の場合、時間変数に力点をおく場合と、行動の獲得に力点を置く場合に分かれることになる。

1. フロイトの心理学的発達論^{1, 2)}

フロイトの発達理論は「心理学的発達論」と呼ばれることがあり、「口唇期（出生～1.5歳くらい）」「肛門期（1～3歳くらい）」「男根期（3～5歳くらい）」「潜伏期（5歳～12歳くらい）」という年齢に対応して、性の視点から捉えた理論である。これは、発達段階に応じて性欲が変化するという意味ではなく「それぞれの発達段階で快を感じる身体部位の変化³⁾」という意味である。

フロイトは発達理論の他にも構造論、力動論などを提起している。これらの理論は彼の臨床経験に基づくものであるが、科学的な方法を用いて得られた理論と呼べるか否かについては、なお議論の余地がある。しかしながら、思想家としてみた場合、後世への影響はきわめて大きい。バンデューラ、エリクソンやボウルビイなどは、何らかの意味においてフロイトとの関連性を指摘できる。

2. ピアジェの認知発達理論⁴⁾

ピアジェは、子どもが与えられた刺激を消極的に受け入れるだけの受動的な存在といった見方から、外界に対してさまざまな実験を試みることで、複雑な認知を獲得する存在と考えた。「認知発達段階理論」である。

この理論によると、子どもの認知発達は「感覚運動段階（0～2歳くらい）」「前操作段階（2～7歳くらい）」「具体的操作段階（7～11歳くらい）」を経て「形式的操作段階（11, 12歳くらい）」に達して大人の認知と同じ機能になる。

感覚運動段階では、対象の永続性の獲得がもっとも重要な課題である。たとえば、10ヶ月の乳児は見ている前で布やスクリーンで隠された対象物を積極的に探そうとするが、見ていないところで対象を移動した場合には、対象に対する関心を急激に失う。したがって、この時期の対象の永続性の獲得は限定的である。

ピアジェとイネルデ⁵⁾は、三つの山課題を用いて、前操作段階の子どもが、自分の見ている視点を離れられない事実を明らかにした。これは、目の前の世界の見方から他者の視点に変更できないことで「自己中心性」と名づけられた。この特性は、自分以外の視点を取得することができないため、自分以外の視点に世界の見方を変更できないと考えられた。

具体的操作段階の子どもは、前操作段階の子どもが獲得していなかった保存の概念を獲得し、特定の対象を、高さ、重さ、あるいは体積といった次元に基づいた順序づけが可能になる。また、現実の活動に対応した表象の形成—たとえば、地図を描くこと—は、この段階において獲得されるが、具体的な体験と対応する場合に限られており、まだ制限されている。

形式的操作段階において、子どもの認知は大人と同じレベルに達する。この段階の子どもは、具体的事物と対応していないシンボルを操作して、思考実験による系統的な仮説検証が可能になる。

V. 「集団」に焦点をあてた発達理論

集団に焦点をあてた場合、複数の役割の人物が登場することになり、時間変数を組み込んでも、見通しの効く理論構築は困難である。したがって、行動の獲得に重点が置かれる。

1. 社会的学習理論⁶⁾

バンデューラの理論は「社会的学習理論」と呼ばれる行動獲得の視点に立つ理論である。これは、1930年代にハルが学習理論と精神分析を関連づける講義を行ったことに触発された理論である。このことに、マウラー、ミラー、ダラード、シアーズなどといった研究者が影響を受け、社会学習理論のパイオニアが誕生した。彼らは、精神分析で用いられていた概念を観察可能な条件づけで説明しようと試みた。

バンデューラは次の世代である。彼が前の世代と一線を画すのは、他者の行動の観察によって行動が獲得されると指摘した点である。ここでは、強化子が必要とされない。この意味では、オペラント条件づけにおける行動の獲得の範囲を大きく広げたことになる。

彼の研究のなかで、もっとも有名なそれは、3歳6ヶ月から5歳11ヶ月の幼児を対象とした「モデルの強化随伴性が模倣反応に及ぼす影響」である。ここでは、攻撃行動の獲得に焦点があてられ、強化子の随伴がなくても、行動の観察によって、幼児が攻撃性を獲得することが示された。

2. ヴィゴツキーの「最近接発達の領域」⁷⁾

ヴィゴツキーはロシア革命後に活躍した旧ソビエト連邦の心理学者である。彼の影響は1980年代以降に大きくなり「心理学のモーツァルト」と呼ばれることがある。「最近接発達の領域」は発達を社会的な視点から捉える重要な理論である。

たとえば、幼児Aは幼児Bが泣いているのを幼稚園で見たが、理由が分からなかった。Aが家に戻って「Bちゃ

ん、どうして泣いていたのだろう」と、独り言をつぶやいた。これに対して、母親が「転んだりしなかった」と応え、Aが「園庭で遊んでいたときに転んだよ」と述べた。その後、母親は「じゃ、痛かったのかな」と言った場面を想定してみよう。他者とのやりとりを通して、幼児は、他者の心のあり方を推論し内面化している。子どもが一人で課題に取り組み、解を得ようとする行動の水準と、他者を通じて課題に取り組むことによって達成する水準にはズレがある。最近接発達の領域はズレの範囲を問題にしている。発達を促進させるためには、他者の存在が不可欠である。他者は環境なのである。

VI. 「生涯」に焦点をあてた発達理論

ヒトの場合、思春期くらいまでの行動の獲得あるいは、変容が目覚ましいため、その頃までを対象にした発達理論の構築が先行したことは、すでに論じた。しかしながら、高齢社会を迎えた今日、発達理論として、子どもの発達のみを対象にするだけでは事足りない。

発達課題を取り巻く課題設定として知られてきたのはハーヴィガーストとエリクソンであるが、彼らの理論は必ずしも正しく理解されていない。ハーヴィガーストがエリクソンに影響を受けたことは確かであるが、実は、エリクソンよりも年長である。彼はウィスコンシン州生まれであり、最初から米国籍であった。それに対して、移民であったエリクソンがアメリカでの研究者生活を開始した頃、ハーヴィガーストは大いに彼を援助している⁸⁾。

1. ビューラーの段階理論⁹⁻¹¹⁾

生涯発達の視点を発達研究に導入した研究者としてシャルロット・ビューラーを忘れることはできない。彼女はベルリンで生まれたが、ナチスの迫害を逃れてアメリカに移住した。その後、ロサンゼルスで活躍し、ヒューマニステック心理学の中心的な役割を担った。彼女のキーワードは「発達課題」「人生目標」「自己決定」で、生涯を5段階に分け、各段階を年齢区分と対応させ、発達課題を仮定した。そして、発達課題に対して、どのように自己決定するのかを検討した。それによれば、第1段階は「誕生～15歳くらい」までで、自己決定はできない。第2段階は「15歳～25歳くらい」までで、人生の目標を仮に設定する時期である。第3段階は「25歳～45-50歳くらい」までである。この段階の人生目標は、漠然とした目標でなく、職業・結婚・家庭などの領域において明確化・特殊化され具体的になる。第4段階は「45-50歳～65-70歳くらい」までで、人生目標の達成について、批判的に評価する時期である。最後の第5段階は「65-70歳以降」で、自己決定が終結する時期である、と述べ

ている。

2. ハーヴィガーストの発達課題の理論¹²⁾

ハーヴィガーストは化学で博士号を取得した後、物理学の研究者として研究生活を始めた異色の研究者である。彼は、発達課題を「個人の一生のそれぞれの時期で求められる課題であり、それに成功すれば、次の発達段階での幸福と課題の成功とがもたらされ、失敗した場合には、その個人は不幸になり、社会的な否認と次の発達段階での課題の難しさをもたらすような課題¹³⁾」と考えた。この理論が、教育現場から高く評価された理由を見て取ることができる。彼は発達課題を論じている(表1)。

菊池によれば、ハーヴィガーストの発達課題における決定要因は3つある。それは「身体的な成熟」「社会的期待」「自発性」である。このうち、自発性とは「積極的に自分からあるタイプの行動をとるようになることで、加齢とともに重要になってくる」と述べている。

3. エリクソンの心理・社会的発達理論

1) 標準的な説明

エリクソンは、フロイトの理論の一部を受け継いでい

るし、ハーヴィガーストにも大きな影響を与えている。ハーヴィガーストが人間の発達課題を教育の視点からみていたのに対し、エリクソンは心理・社会的な視点を重視していた。このことはハーヴィガーストが「発達課題」という言葉を用いているのに対し、エリクソンの理論が「心理・社会的発達理論」と呼ばれることから推測できる。エリクソンは「予定表」や「漸成説」という言葉を用いているため、ハーヴィガーストと同様に決定論的な説明に聞こえる。この根拠は『ライフサイクル、その完結』において「図式1」を作成した事実である(表2¹⁴⁾)。表のEからHは省略されることが多いが、この表は看護学における標準的な説明ではないだろうか(表2)。

2) 新しい解釈

エリクソンの生涯発達理論を学生に教えるにあたり、筆者は違和感をおぼえていた。彼の生涯発達理論において、もっとも有名なのは、エピジェネティック・チャート(epigenetic chart)である(図1)。このチャートは「乳児期」「幼児初期」「遊戯期」「学齢期」「青年期」「前成人期」「成人期」「老年期」の8段階にわけた図で、8*8の64セルが描かれている。しかし、実際には対角線

表1 ハーヴィガーストの発達段階と発達課題(菊池, 2010 許可を得て転載)

幼児期と児童期初期	7) 価値観と倫理体系の習得
1) 歩行の学習	8) 社会的に責任ある行動の追求とその獲得
2) 固形食をとる学習	成人初期 (18-30歳)
3) 話すことの学習	1) 結婚相手の選択
4) 排泄を統制する学習	2) 結婚相手との生活の学習
5) 性差と性的慎みの学習	3) 家族生活のスタート
6) 概念の形成と社会的・物理的現実を記述することばの学習	4) 子どもの養育
7) 読むことの準備	5) 家庭の管理
8) 善悪の区別の学習と良心の発達の始動	6) 職業生活のスタート
児童期中期	7) 市民としての責任の達成
1) 日常のゲームに必要な身体的スキルの学習	8) 適切な社会集団への参加
2) 成長する生活体としての自分への健全な態度の構築	中年期 (30-60歳)
3) 同年齢の友人とうまくつきあうことの学習	1) 十代の子どもの責任ある・幸福な大人への育成
4) 男子あるいは女子としての適切な社会的役割の学習	2) 大人としての市民的・社会的責任の達成
5) 読み・書き・計算の基礎的スキルの発達	3) 職業生活での満足のできる業績の達成とその維持
6) 毎日の生活に必要な概念の発達	4) 大人としての余暇生活の充実
7) 良心・道徳性・価値判断の手がかりの発達	5) つれ合いと人間的な結びつきの達成
8) 個人的独立の獲得	6) 中年の生理的变化への適応
9) 社会集団と制度についての態度の発達	7) 年齢を重ねる両親への対応
青年期 (12-18歳)	その後の成熟期
1) 両性の同年齢の友人との新しい・より成熟した関係の獲得	1) 身体と健康の衰退への適応
2) 男性あるいは女性の社会的役割の獲得	2) 引退と収入の減少への適応
3) 自分の身体を受容とその有効な使用	3) 配偶者の死への適応
4) 両親や他の大人からの情緒的独立の獲得	4) 同年齢グループへの積極的参加
5) 結婚と家庭生活への準備	5) 社会的役割への柔軟な対応
6) 経済的面で将来への準備	6) 身体的に満足のいく生活環境の準備

表2. エリクソンの「図式1」(エリクソン & エリクソン, 2001 許可を得て転載)

発達段階	A 心理・性的な段階と様式	B 心理・社会的危機	C 重要な関係の範囲	D 基本的強さ	E 中核的病理 基本的な不協和傾向	F 関連する社会秩序の原理	G 統合的儀式化	H 儀式主義
I 乳児期	口唇－呼吸器的, 感覚－筋肉運動的	基本的信頼 vs 基本的不信	母親的人物	希望	引きこもり	宇宙的秩序	ヌミノース的	偶像崇拜
II 幼児初期	肛門－尿道的, 筋肉的	自律 vs 恥・疑惑	親的人物	意志	強迫	「法と秩序」	分別的 (裁判的)	法律至上主義
III 遊戯期	幼児－性器的, 移動的	自主性 vs 罪悪感	基本家族	目的	制止	理想の原型	演劇的	道徳主義
IV 学齡期	「潜伏期」	勤勉 vs 劣等感	「近隣」, 学校	適格	不活発	技術的秩序	形式的	形式主義
V 青年期	思春期	同一性 vs 同一性の混乱	仲間集団と外集団: リーダーシップの諸モデル	忠誠	役割拒否	イデオロギー的世界観	イデオロギー的	トータリズム
VI 前成人期	性器期	親密 vs 孤立	友情, 性愛, 競争, 協力の関係におけるパートナー	愛	排他性	協力と競争のパターン	提携的	エリート意識
VII 成人期	(子孫を生み出す)	生殖性 vs 停滞	(分担する) 労働と (共有する) 家庭	世話	拒否性	教育と伝統の思潮	世代継承的	権威至上主義
VIII 老年期	(感性的モードの普遍化)	統合 vs 絶望	「人類」「私の種族」	智慧	侮蔑	英知	哲学的	ドグマティズム

VIII 老年期								統合 対 絶望 智慧
VII 成人期							生殖性 対 停滞 ケア	
VI 前成人期						親密 対 孤立 愛		
V 青年期					同一性 対 同一の性混乱 忠誠			
IV 学齡期				勤勉 対 劣等感 適格				
III 遊戯期			自主性 対 罪悪感 目的					
II 幼児初期		自律 対 恥・疑惑 意志						
I 乳児期	基本的信頼 対 基本的不信 希望							
	1	2	3	4	5	6	7	8

図1. エリクソンのエビジェネティック・チャート (エリクソン & エリクソン, 2001 許可を得て転載)

上のセルだけに言葉が記載されており、残りのセルはすべて空白であった。これは何なのだろう。

筆者にとって、このことは謎であったのだが、数年前に鈴木¹⁵⁾が素晴らしい説明を提起した。対角線上のセルには、たとえば、乳児期の場合「基本的信頼 対 基本的不信」と対立する2項が表記されている。これが「心理・社会的危機」である。この下の文字は「土台となる強さ」で、心理・社会的危機を乗り越えることによって獲得される。乳児期の場合「希望」である。

では、空欄は何か。彼は、この空白を『『練り直す』可能性を追求するため『空欄』』と述べている。これは画期的な見解であるが、根拠は何だろうか。彼は『ライフサイクル、その完結』におけるエリクソンの次の見解に求めた：「この図式は、垂直方向に見た場合には、各々のステップが、それ以前のすべてのステップにもとづいて示し、一方、水平方向に見た場合には、どの一つの徳であっても、その発達の成熟（及び、心理・社会的危機）が、より高次の、発達途上にある段階に新たな意味合いを付与すること、また同時に、より「低次」の、すでに発達し終わった段階にも新たな意味合いを付与することを示している」¹⁵⁾

鈴木のリジックは非常に重要である。つまり、空白は、各ステップがいったん達せられた場合であっても、再学習が可能であり、別様に意味づけ可能なことを示しているからである。

さて、こうなると、エリクソンの心理・社会的発達理論とハーヴィガーストの発達課題の違いは歴然である。鈴木¹⁵⁾によると、後者では「単線的で標準的な発達が仮定されており、課題を解決して“一件落着”させることの連なりとして発達を捉えている」のに対して、エリクソンでは、やり直し可能性が強調されている。ヒューマン・ケアを目指す学生にとって、決定的に重要な相違ではないだろうか。

VII. 愛着の理論¹⁶⁻¹⁸⁾

最後に、愛着は、人の発達に基盤を与える心の機能なので、この理論を取り上げる。愛着は、乳児期の母親あるいは、母親的に世話をしてくれる人物との繋がりによって、乳児が社会生活に参加し、そのなかで個性化を可能にする中枢概念である。「愛着理論」を構築したのはボウルビイであった。それ以前は、母子の繋がり（mother-child bond）は二次動因と考えられていたのだが、ローレンツやハーロウの研究結果から、二次動因説に疑問を投げかける結果が得られていた時代精神のなかで、ボウルビイは愛着理論を提起した。

1. 愛着理論が必要とされた経緯

愛着理論が必要とされた経緯は第二次世界大戦によって、世界中に戦災孤児が多数生じたことである。戦後すぐの頃、わが国でも戸籍が分からない戦災孤児がトラックの荷台に多数載せられて措置された時代であったと、第一筆者は厚生労働省児童家庭局に勤務していたときに聞いたことがある。こういった子どもの多くが児童福祉施設や病院に長期間、収容された。このときの彼らの問題行動は「施設症」と呼ばれていた。ボウルビイの母性的養護の喪失（deprivation of maternal care）は施設症とかかわりが深い。

2. 愛着の発達

ボウルビイ¹⁶⁾は「アタッチメント理論は、特定の個人に対して親密な情緒的きずなを結ぶ傾向を人間性の基本的な構成要素」とみなしている。それでは、それは、どのようなプロセスを経て獲得されるのだろうか。彼¹⁷⁾によれば、生後12週以降に「一人の弁別された人物への定位と発信」が起こるようになるという。この一人の人物は母親あるいは母親的人物であるが、この時期に「人物弁別をとまわらない定位と発信」が先立つという。母親的人物への定位と発信の後「発信ならびに手段による弁別された接近」が維持するようになる。この時期になって、人物弁別が母親的人物から父親などの二次的愛着対象が獲得される。そして、これが2、3歳くらいまで継続する。母親的人物が探索のための安全基地（secure base）として使用されるのは、この時期である。この概念はボウルビイの共同研究者エインスワース¹⁸⁾によって提唱された。

こういった愛着の形成が困難な施設において長期間生活せざるを得ない子どもの生活は本当に気の毒である。こういった子どもを多数誕生させる時代が2度とこないことを切に祈る。

VIII. おわりに

本稿では発達理論の歴史的な系譜とハーヴィガーストおよびエリクソンの理論の差異を中心に検討した。そして、これまで看護学では言及されることのなかったエリクソンの生涯発達理論の新しい解釈を提示した。

まず、諸理論の特徴を捉えた看護への応用について述べたい。本稿では発達理論の焦点から「個人」「集団」「生涯」に整理して述べた。一概に決めつけることはできないが、その子・その人「個人」の発達の有り様を捉える手がかりの一つとして、フロイト、（特に小児では）ピアジェが活用できる。活用の際は、理論で示されている年齢区分の発達状態をその子・その人に当てはめてみることで、その子・その人を看護師が観察してどの段階に

あるのかを検討することの両方が重要である。次に、行動の獲得や発達を促進する支援の計画立案と看護実践においては、バンデュラ、ヴィゴツキーが有用になる。そして、看護実践の目標を見据えた看護支援の提供には、「生涯」の発達を見据えた発達理論を用いることで、対象者の生涯発達に叶った目標を見出し、働きかけることにつながる。その上で、エリクソンの心理・社会的発達理論の新しい解釈の適用を以下で考察する。

看護学研究では、しばしば病の発症に伴う人の人生、生活、あるいは役割の変化への支援を探求することがある。また、看護実践では病を持つ人の揺らぎと向かい合う。本稿で提示したエリクソン生涯発達の「やり直し可能性」は、こういった人の変化・揺らぎの解釈と支援をスムーズにする。例えば、それまでスポーツを得意としてきた思春期の子どもが、疾患で足を切断せざるを得なくなったと仮定してみよう。その子はスポーツによって、学齢期においては適格をという「土台となる強さ」を獲得してきたかもしれない。思春期になったいま、心理・社会的発達理論は「同一性対同一性混乱」で、獲得すべき土台となる力は「忠誠」であるが、新たな自分の在りようを持ってした適格の獲得をも必要とする。そのため、単に思春期の心理・社会的発達理論を当てはめるのではなく、新たな解釈の適用し、病によって生じた変化がその子の生涯発達の練り直しをどの様に必要とするのかを検討することができる。また、そのような練り直しの必要性の検討によって、対象者が病によって直面する多重的な課題を理解して、共感を持ってケアすることにも繋がり、看護の対象者の生涯発達と、その人の持てる対処の力を支援することにつながるであろう。

引用文献

- 1) 前田重治. 図説 臨床精神分析学. 東京: 誠信書房; 1985.
- 2) 前田重治. 続 図説 臨床精神分析学. 東京: 誠信書房; 1994.
- 3) 木部則雄. 精神分析の発達理論. 田島信元・岩立志津夫・長崎勤編. 新・発達心理学ハンドブック. 東京: 福村出版; 2016.
- 4) スミス, EE, ノーレン-ホックゼーマ, S. フレッドリックソン, BLほか (内田一成監訳). ヒルガードの心理学. 第14版. 東京: プレーン出版; 2005. p. 97-101.
- 5) Piaget, J. & Inhelder, B. The child's conception of space. London: Routledge & Kagan Paul; 1956.
- 6) バンデュラ, A (原野広太郎, 福島脩美訳). モデルの強化随伴性が模倣行動に及ぼす影響. バンデュラ, A. (編). モデリングの心理学. 東京: 金子書房; 1975. p. 123-38.
- 7) 中村和夫. ヴィゴツキーの発達論: 文化-歴史的理論の形成と展開. 東京: 東京大学出版会; 1998.
- 8) フリードマン, LJ. (やまだようこ・西平直監訳). エリクソンの人生 (上). 東京: 新曜社; 2003.
- 9) Bühler, C. The curve of life as studies in biographies. J Appl Psychol. 1953; 19: 405-9.
- 10) Bühler C. The course of human life as a psychological problem. Hum Dev. 1968; 11(3): 184-200.
- 11) ビューラー, K (原田茂訳). 幼児の精神発達. 東京: 協同出版; 1966.
- 12) ハーヴィガースト, R. J (荘司雅子監訳). 人間の発達課題と教育. 東京: 玉川大学出版部; 1995.
- 13) 菊池章夫. Hさんを読み直す: 発達課題再見. 菊池章夫・二宮克美・堀毛一也ほか編. 社会化の心理学/ハンドブック: 人間形成への多様な接近. 東京: 川島書店; 2010.
- 14) エリクソン EH & エリクソン JM (村瀬孝雄・近藤邦夫訳). ライフサイクル, その完結. 東京: みすず書房; 2001.
- 15) 鈴木忠. 第3章へのコメント 危機を「解決」とは. 鈴木忠・西平直編. 生涯発達とライフサイクル. 東京: 東京大学出版会; 2014. p. 156-68.
- 16) ボウルビィ J (二木武監訳). 母と子のアタッチメント: 心の安全基地. 東京: 医歯薬出版; 1993.
- 17) ボウルビィ J (黒田実郎・大羽葵・岡田洋子ほか訳). 母子関係の理論: I 愛着行動. 東京: 岩崎学術出版; 1976.
- 18) Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E. et al. Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation. New York: Lawrence Erlbaum Associates; 1976.